原著

3 次元培養法による上眼瞼溝深化 (deepening of the upper eyelid sulcus : DUES) の分子病態に関する検討

伊藤格,日景史人,井田洋輔,大黒 浩 ^{札幌医科大学 眼科学講座}

Molecular pathological study of deepening of the upper eyelid sulcus through a threedimension tissue culture.

Kaku ITOH, Fumihito HIKAGE, Yosuke IDA, Hiroshi OHGURO.

Departments of Ophthalmology, Sapporo Medical University School of Medicine

ABSTRACT

PURPOSE: To elucidate the molecular pathology of deepening of the upper eyelid sulcus (DUES) induced by prostaglandin analogues (PGs), through a three-dimension (3D) tissue culture system using human orbital fibroblasts (HOFs).

METHODS: Effects of either 100 nM bimatoprost acid (BIM) or 100 nM prostaglandin F2a (PGF2a) were examined for the 3D organoids from HOFs. The size of BIM and PGF2a organoids were measured during cultivation, and evaluated the expression of the extracellular matrix (ECM) by immunolabeling and quantitative PCR.

RESULTS: The size of the 3D organoids become smaller by the presence of PGs. Unique changes in ECM expressions were also observed upon the presence of PGs.

CONCLUSIONS: Our present study suggests that PGs have the influence to regulate the expression of ECMs' network within the HOFs 3D organoids. Thus, a 3D tissue culture system may be a suitable strategy toward understanding disease etiology of DUES.

(Received September 4, 2019 and Accepted October 23, 2019) Key words: deepening of the upper eyelid sulcus (DUES), prostaglandin analogues, three-dimension (3D) tissue culture

1 緒言

緑内障は眼圧上昇に伴い徐々に視野欠損が進行し, 失明に至る可能性がある視神経疾患で,機序として軸 索障害や血流障害,遺伝的要因などを含め多くの要因 が報告されている¹⁻³⁾.緑内障の治療として,薬物療法, レーザーまたは手術により眼圧を適正に管理すること がエビデンスに基づく唯一の方法である⁴⁻⁶⁾.薬物療 法の中でもプロスタグランジン誘導体(Prostaglandin analogs: PGs)点眼薬は眼圧下降効果が高くかつ全 身的な副作用が少ないことから,緑内障治療薬の第一 選択薬として用いられている^{7,8)}.一方,本剤の長期 使用により結膜充血,睫毛発育促進,虹彩および眼瞼 の色素沈着に加え上眼瞼溝深化(Deepening of the upper eyelid sulcus: DUES)が報告されている⁹⁻¹¹⁾. 中でもDUES は点眼薬の継続使用により,眼窩部脂肪

の減少に伴い上眼瞼の眼窩縁に窪み(溝)の深さが増 大し、眉毛部下縁前頭骨縁が顕著になる整容的な副作 用である、ビマトプロストで60%、トラボプロストで 50%, ラタノプロストで24%, タフルプロストで18% の症例で併発するという報告がある12-14).しかし、現 状で DUES の詳しい機序は不明であるものの臨床的 に MRI 所見より眼窩部脂肪組織の萎縮性変化が原因 であることが示唆されている¹⁵⁾.実際に Taketani ら はマウスの腹腔内脂肪である 3T3-L1 細胞を用いて、 PGs がプロスタノイド F 型プロスタグランジン受容体 (prostanoid F-type prostaglandin receptor: FP 受 容体)を介して脂肪分化誘導を抑制することを報告し た¹⁶⁾. またヒト眼窩部脂肪組織の2次元培養において, 高濃度の PGs が脂肪分化誘導制御遺伝子の一つである peroxisome proliferator-activated receptor gamma (PPARy) が抑制されたとの報告もある¹⁷⁾.

しかしながら成人の眼窩部脂肪組織は一般的に増殖 能が活発ではなくむしろ停止安定化状態にあるため PGs によって引き起こされる DUES の病態機序は脂 肪分化誘導の制御よりも,眼窩部脂肪とそれを取り巻 く細胞外マトリクス (extra cellular matrix: ECM) の3次元構造の変化による可能性が示唆される.従っ てこの仮説を検討するためには通常の眼窩部脂肪組織 を用いた2次元培養ではなく,3次元的に ECM を含 めたより生体に近い形での評価が可能である実験系で 検討する必要がある¹⁸⁾.最近我々のグループは,新 しい3次元培養系を用いて甲状腺眼症の眼窩部脂肪 組織の分子病態を検討したところ,炎症に伴って眼窩 部脂肪増殖にhypoxia-inducible factor 2α (HIF2 α) が関わることと治療ターゲットになりうる可能性を示 唆した¹⁹.

今回我々は、この新しい3次元培養法を用いて PGsにより引き起こされる DUES の分子病態を検討 したので報告する.一般的に脂肪細胞は部位ごとに性 質が異なり、皮下脂肪と内臓脂肪の間においてもそれ ぞれ異なる分子病態をもつことが報告されている²⁰⁾. したがって本研究では脂肪研究で最も頻繁に使用され るマウスの腹腔内脂肪である 3T3-L1 細胞よりもよ り臨床に近いヒト眼窩部脂肪組織を用いた.

2 実験方法

2・1 実験に用いた主な試薬

Dulbecco's Modified Eagle's Medium (DMEM) (No. 11965118; Gibco/Thermo Fisher Scientific, Waltham, MA), Fetal Bovine Serum (FBS) (No. A3160402; Gibco/Thermo Fisher Scientific), L-glutamine (No. 25030081; Gibco/Thermo Fisher Scientific), Antibiotic-Antimycotic (No. 15240062; Gibco/Thermo Fisher Scientific), Methylcellulose (Methocel A4M) (No. 94378; Sigma-Aldrich, St. Louis, MO), Trypsin-EDTA (0.25%), phenol red (No. 25200056; Gibco/Thermo Fisher Scientific), Phosphate Buffered Salts pH7.4 (PBS) (No.10010049; Gibco/Thermo Fisher Scientific), Dimethyl sulfoxide (DMSO) (No. D2650; Sigma-Aldrich), Bimatoprost free acid (No. 16810; Cayman chemical), Prostaglandin (PG) F2 α (No. 16010; Cayman chemical), Anti-Collagen Type 1, Rabbit-Poly (No. 600-401-103-0,1; ROCKLAND, Limerick, PA), Anti-Collagen Type 4, Rabbit-Poly (No. 600-401-106-0,1; ROCKLAND), Anti-Collagen Type 6, Rabbit-Poly (No. 600-401-108-0,1; ROCKLAND), Fibronectin (EP5), mouse monoclonal IgG (No. sc-8422; Santa Cruz Biotechnology, Mississauga, Canada), 4',6-diamidino-2-phenylindole solution (DAPI) (No. D523; Dojindo, Japan), PhalloidiniFluor 594 Conjugate (No. 20553; Cayman Chemical), F(ab')2-Goat anti-Rabbit IgG(H+L) Secondary Antibody, Alexa Flour 488 (No. A11070; Gibco/ Thermo Fisher Scientific), F(ab')2-Goat anti-Mouse IgG(H+L) Secondary Antibody, Alexa Flour 488 (No. A11070; Gibco/Thermo Fisher Scientific), Albumin solution, from bovine serum (BSA) (No. A8327, Sigma-Aldrich), Prolong Gold Antifade Mountant (No. P36934; Gibco/Thermo Fisher Scientific)

2・2 ヒト眼窩部脂肪組織の培養

眼科非炎症性疾患4症例(眼窩脂肪ヘルニア2例: 60歳台男性,70歳台女性,斜視2例:40歳台男性, 50歳台男性)に対して札幌医科大学附属病院で眼科 手術を施行した際に廃棄される眼窩部の脂肪組織塊を, 本学倫理委員会の承認(承認番号:312-3190)の下, 患者様に術前に十分な説明と同意を得たうえで本研究 の実験に用いた.脂肪組織塊を採取後直ちに100mm の滅菌シャーレ上で細かく分割し,10% FBS,1% L-Glutamineおよび1%Antibiotic-Antimycoticを 含むDMEM培養液を加え,37℃かつ5% CO2の湿 潤環境下にて培養した.培養液は2-3日に一度交換し, 得られた線維芽細胞(Human orbital fibroblasts: HOFs)を継代(3-7回)して以下の3次元培養に使 用した.

2・3 HOFs の 3 次元培養

100 mm 及び 150 mm の滅菌培養シャーレにて 90-100 % コンフルエントの状態まで培養した HOFs を PBS で2回洗浄後, 0.25 % trypsin-EDTAを用いてシャー レより剥離回収し,培養液を加え 300 × g で 5 分間 遠心させ HOFs ペレットとした.3 次元培養プレート には, hanging drop culture plate (No.HDP1385; Sigma-Aldrich)を用いた.3次元培養で形成される オルガノイドの形状を安定させる目的で 0.25 % Methocel を加えた培養液で HOFs ペレットを懸濁し, 1-well (28 μ L) あたり約 20,000 細胞になるよう調 整後培養を開始した (Day-0).培養液の交換は毎日 1-well あたり 14 μ L を吸引除去し,新しい培養液 14 μ L と交換した.

Figure 1 に示すように HOFs の 3 次元培養は 12 日 間のプロトコルで行った. 従来から使用されているト ラボプロスト, ラタノプロスト, タフルプロストは prostaglandin F2 α 誘導体で, いずれも FP 受容体を 介して眼圧下降効果を示す一方, bimatoprost はプロ スタマイド F2 α 誘導体で, PM 受容体を介して眼圧 下降効果を示す薬剤である. いずれの薬剤も最も高頻 度で DUES を引き起こすことが知られており,本研 究においては PGs 群としては bimatoprost (BIM)



Figure 1. HOFs を用いた 3 次元培養プロトコル.

Day-0 で各 Well に 20,000 個の細胞を撒き, Day-1 より 0.25 % Methocel, 0.1 % DMSO を加えた培養液を Day-12 まで毎日 交換した (CONT群). CONT群と同じ培養液にそれぞれ100 nM bimatoprost (BIM群), 100 nM prostaglandin F2α (PGF2α群) を加えて同様に 3 次元培養した. Scare bar: 100 μm.

または prostaglandin F2 α (PGF2 α)を用いた.濃度は1 μ M から10,000 μ Mまで検討し,各濃度での結果に差がないことを他の実験で確認しており,本研究では既報に則って100 μ Mでの濃度を設定した¹⁶. 薬剤の溶媒として使用した DMSOの濃度を揃えるため,コントロール群(CONT)の培養液には0.1% DMSO を加え,オルガノイドの培養を行った.

2・4 HOFs オルガノイドのサイズ測定および解析

HOFs オルガノイドのサイズ測定は培養中 3 次元 培養プレートを顕微鏡 (Nikon ECLIPSE TS2; Tokyo, Japan) で連日撮像 (倍率×4) し行った.各群で HOFs オルガノイドの最大径が描出される高さにて撮像 し (n=16), Image-J software version 1.51n (National Institutes of Health, Bethesda, MD) で解析した. 同様の測定を異なる脂肪組織からの4サンプルにて 行った.

2・5 オルガノイドの免疫組織染色

培養 12 日目 (Day-12) で回収したオルガノイド を4% PFA in PBS を用いて24時間固定し,3% BSAを用いてブロッキング,PBSで2回洗浄後,1:200 に濃度調整した一次抗体 (Collagen Type 1, Type 4, Type 6, および Fibronectin)を加えて4℃の環境下で 24時間培養した.PBS を用いて3回洗浄後,1:500 に 濃度調整した二次抗体,1:1000 に濃度調整した DAPI および Phalloidin を加えて室温で3時間培養した.そ れぞれのオルガノイドをカバーガラスへ移し、ProLong Gold を用いて封入した. 共焦点顕微鏡 (Nikon A1 confocal microscopy, Tokyo, Japan)を用いて免疫 染色されたオルガノイドを撮像した. 倍率 20 倍の対 物レンズを用い、オルガノイドの底面から 35 μ m の 高さまで、2.2 μ m 間隔で 16 枚、1024 × 1024 ピクセル に設定し撮像を行い、NIS element 4.0 software の maximum intensity projectionを用いて Z-stack 画 像を得た. 得られた画像のオルガノイドに含まれる染 色輝度総量を Image-J software version 1.51 n を用 いて定量した. COL-1、COL-4 は n=6、COL-6 は n=7、Fibronectin は n=4 でそれぞれ解析した.

2.6 遺伝子発現解析

培養 12 日目 (Day-12) で各群 16 個ずつの HOFs オルガノイドを回収し RNeasy mini kit (Qiagen, Valencia, CA)を用いて RNA を抽出した. cDNA の 作成には SuperScript IV kit (Invitrogen)を用いた. 遺伝子発現解析には StepOnePlus machine (Applied Biosystems/Thermo Fisher Scientific)を使用, Power SYBR Green Master Mix および Universal TaqMan Master Mixを用いて real-time PCR (qPCR)を行った. cDNA 量の normalization には 36B4 (RPLP0)を用い た. すべての群は n=4 でそれぞれ解析した. プライ マーの DNA 塩基配列を以下に示す.

human RPLP0

(Probe: 5'-/56-FAM/CCCTGTCTT/ZEN/CCCTGG

GCATCAC/3IABkFQ/-3'),

(Forward: 5'-TCGTCTTTAAACCCTGCGTG-3'), (Reverse: 5'-TGTCTGCTCCCACAATGAAAC-3'). human COL1A1

(Probe: 5'-/56-FAM/TCCAGGGCC/ZEN/AAGAC GAAGACATC/3IABkFQ/-3'),

(Forward: 5'-GACATGTTCAGCTTTGTGGAC-3'), (Reverse: 5'-TTCTGTACGCAGGTGATTGG-3'). human COL4A1

(Probe: 5'-/56-FAM/TCATACAGA/ZEN/CTTGG CAGCGGCT/3IABkFQ/-3'),

(Forward: 5'-AGAGAGGAGGAGGAGATGTTCA-3'), (Reverse: 5'-TGAGTCAGGCTTCATTATGTTCT-3'). human COL6A1

(Forward: 5'-CCTCGTGGACAAAGTCAAGT-3'),

(Reverse: 5'-GTGAGGCCTTGGATGATCTC-3'). human FN1

(Forward: 5'-CGTCCTAAAGACTCCATGATCTG-3'), (Reverse: 5'-ACCAATCTTGTAGGACTGACC-3').

2・7 統計学的解析

解析には GraphPad Prism 7 (GraphPad Software, San Diego, CA) を用いた. グループ間の解析は oneway ANOVA (followed by a Tukey's multiple comparison test) にて行い, 95 %の信頼区間を設定 した.

3 結果

Figure 2に示すように3次元培養12日目 (Day-12) までに球形の HOFs は徐々に小さなサイズのオルガ





A) Day-1及び Day-12 における各群の HOFs オルガノイドの写真. Scare bar: 100 µm. B) Day-12 までの各群の HOFs オルガノイドの最大断面積 (µm²) 変化. C) Day-1 および Day-12 におけるオルガノイドの最大断面積 (µm²) 比較. Day-1 では有意差が認められなかったが, Day-12 では CONT 群に比べて PGs 群 (BIM 群, PGF2 α 群) において有意にサイズ縮小が認められた. *** P<0.005, N.S., not significant (ANOVA followed by a Tukey's multiple comparison test).

ノイドに成熟安定化した. CONT 群に比べ, BIM または PGF2 αを加えた群の HOFs 培養オルガノイドの最大径は 3-4 日目より有意に小さくなったものの,両薬剤間で有意差は見られなかった.4 検体とも同様の結果を得たため, Figure 3 では代表症例として 50

歳代男性における結果を提示した.

次に各群での ECM の変化を検討するために Day-12 で回収した HOFs オルガノイドを用いて HOFs の主 要な ECM である Collagen type I (COL-1), type IV (COL-4), type VI (COL-6) および Fibronectin-1



Figure 3. 主な ECM (COL-1, COL-4, COL-6, 及び FN-1) 抗体を用いた HOFs オルガノイドの免疫染色.
A) 多重染色の confocal image. CONT 群 COL-6 の一例. 培養オルガノイドの細胞の状態を確認する目的で行い,内部壊死がないことを確認している. Scare bar:100 μm. B) confocal image. Scare bar:100 μm. C) 各 ECM 抗体による染色輝度の定量解析. ** P<0.01, *** P<0.005, N.S., not significant (ANOVA followed by a Tukey's multiple comparison test).

COL-1 COL-4 2.5 2.0-*** 2.0-N.S. 1.5 1.5 1.0 1.0 0.5-0.5 0.0 0.0 COL-6 FN-1 N.S. N.S. 2.0-N S N.S. 1.5 1.0 2 0.5 0.0 (-) (+) (-) (-) (+) (-) BIM BIM (-) (-) (+) $PGF2\alpha$ (-) (+) (-) $PGF2\alpha$

Figure 4. HOFs オルガノイド (Day-12) における主な ECM (COL-1, COL-4, COL-6, 及び FN-1) の qPCR 遺伝子発現. PG 剤 (BIM 及び PGF2 α) の付加により, 主に COL-1 の発現増強が認められた. * P<0.05, ** P<0.01, *** P<0.005, N.S., not significant (ANOVA followed by a Tukey's multiple comparison test).</p>

(FN-1)の発現を、検体ごとの区別はせずに、それ ぞれ特異抗体を用いた免疫染色および qPCR 遺伝子 発現定量解析を行った. Figure 3 および 4 に示すよ うに COL-1 の発現は、CONT 群に比較して BIM 群 及び PGF2 α 群で有意に増加した. COL-4 は qPCR にて PGF2 α 群において有意に増加したもののタンパ ク発現に変化はなく、COL-6およびFN-1においては、 各群の有意な変化は見られなかった. 従って PGs に よる HOFs 培養オルガノイドのサイズの変化は主要 ECM である COL-1 の発現増加による可能性が示唆 された.

4 考察

従来の2次元培養系を用いた検討では、DUESは 眼窩内脂肪組織の萎縮性変化であり、その機序として PGsが脂肪分化誘導のマスター遺伝子である PPARy の発現を抑制することで、前脂肪細胞ならびに成熟脂 肪細胞における脂肪分化誘導の抑制が考えられてき た^{16,17)}.また3T3-L1細胞を用いた検討でFP受容体 をノックアウトしたマウスの細胞を用いると、PGsに よる脂肪分化誘導は抑制されなかったことから、DUES はFP受容体を介する機序により引き起こされることが 示唆されている¹⁶⁾.実際に我々のグループも3T3-L1 細胞を用いた3次元培養系においてPGsが脂肪分化 誘導により形成されるオルガノイドのサイズの抑制が みられ、回収したオルガノイドのqPCRにおいて、 Pparyの発現抑制がみられることを見出している(他誌投稿中).またヒト眼窩部脂肪細胞を用いた3次元培養においては、3T3-L1細胞を用いた場合、培養期間7日程度で十分な脂肪分化誘導が見られるのに対して、ヒト眼窩部脂肪細胞は脂肪分化誘導しづらいものの、培養期間を12日間に延長することで十分な脂肪滴を伴う成熟脂肪細胞を得ることができることが報告されている¹⁹.

本研究において、ヒト眼窩部より得られた脂肪組織 より3次元培養した HOFs オルガノイドを作成し、 脂肪分化誘導をしないオルガノイドに対して PGs の 影響を検討した結果、HOFs オルガノイドのサイズの 減少と COL-1 の発現増加という新知見を得た.3次 元培養においては個々の細胞の自己組織化を利用し、 細胞 - 培養基材間より細胞間接着が強くなる環境を 整えることで細胞塊 (spheroid)の構築を促進する. 同時に ECM の産生を含めた細胞間接着等の影響によ り、培養細胞が成熟した3次元構造に変化すること でサイズが縮小変化することが報告されている²¹⁾. 今回得られた結果は、DUES の病態には脂肪分化誘 導の抑制以外に脂肪細胞を取り巻く3次元的な ECM ネットワークの環境が変化することが関与する可能性 を強く示唆するものである.

一般的に ECM は立体的な生体組織において,その 構造の形成や維持,細胞間のシグナル伝達や機能制御 を含め,非常に大切な役割を担っている²²⁾. Collagen は 細胞-細胞間ないし細胞- ECM 間において三重らせん 構造を形成しているタンパクで,関連するものを含め 30 を超える分子種が存在する²³⁾.中でも最も豊富に 存在するものは COL-1 である²⁴⁾.COL-4 は基底膜 に存在する Collagen として知られている^{25,26)}. COL-6 は COL-1 同士を架橋する Collagen として存 在し,主に分化した細胞においてその生存や機能制御 を司る役割のほか,脂肪分化誘導を含めた多くの細胞 の分化誘導を制御する役割も担っていると考えられて いる²³⁾.FN-1 は細胞形状や組織形状を構成する ECM で,COL-1 に隣接して存在している²⁷⁾.ECM の発現や機能は 2 次元環境下と 3 次元環境下では大 きく異なることが報告されており,より生体に近い形 での分子病態を評価できる 3 次元培養系は,DUES の評価により適したモデルと考えられる²²⁾.

今回得られた HOFs オルガノイドの ECM 遺伝子 発現において、COL-6 および FN-1 については PGs の影響はほとんど見られなかった. しかし HOFs オ ルガノイドを取り巻くこれらの ECM の3次元的ネッ トワークの中で主要な ECM である COL-1 の発現が PGs により有意に増加したことは、COL-1 がこれら のHOFs オルガノイドの3次元的構造環境を大きく 変化させうる可能性を示唆する.実際に ECM の発現 と組織のサイズの関連において、COL-1の発現が多 いと組織サイズは小さくなることやブレオマイシン誘 発肺線維症病態モデルにおいて、PGF2αにより、 COL-1の発現が増強に伴い肺組織の線維化が引き起 こされる機序が報告されている²⁸⁻³²⁾.本研究は培養 液中の薬剤の効果によりオルガノイドの縮小の度合い を評価したもので、ヒト眼窩部脂肪組織において PGs によりもたらされる COL-1 の有意な発現増強が DUES の病態学的機序の一つとなりうることは容易 に想像でき、またこの機序は新たな DUES に対する 予防ならびに治療戦略になりうる可能性が示唆される.

結論として本研究において,新しい3次元培養系 を用いることで,ヒト眼窩部脂肪組織の線維芽細胞に 対するプロスタグランジン関連薬の影響を検討し, DUESの分子病態に関する新たな知見を得ると同時 に,DUESの病態モデルとして3次元培養系が有効 であることが改めて確認された.

本研究に関し、開示すべき利益相反状態は存在しない.

5 文献

- Liton PB, Luna C, Challa P, Epstein DL, Gonzalez P: Genome-wide expression profile of human trabecular meshwork cultured cells, nonglaucomatous and primary open angle glaucoma tissue. Mol Vis 2006; 12:774-790
- 2. Smid SD: Role of prostaglandins and specific place in

therapy of bimatoprost in the treatment of elevated intraocular pressure and ocular hypertension: A closer look at the agonist properties of bimatoprost and the prostamides. Clin Ophthalmol 2009; 3: 663-670

- Comparison of glaucomatous progression between untreated patients with normal-tension glaucoma and patients with therapeutically reduced intraocular pressures. Collaborative Normal-Tension Glaucoma Study Group. Am J Ophthalmol 1998; 126: 487-497
- Mackenzie P, Cioffi G: How does lowering of intraocular pressure protect the optic nerve? Surv Ophthalmol 2008; 53 Suppl1: S39-43
- 5. Kass MA, Heuer DK, Higginbotham EJ, Johnson CA, Keltner JL, Miller JP, Parrish RK, 2nd, Wilson MR, Gordon MO: The Ocular Hypertension Treatment Study: a randomized trial determines that topical ocular hypotensive medication delays or prevents the onset of primary open-angle glaucoma. Arch Ophthalmol 2002; 120: 701-713;discussion 829-730
- Cheng JW, Cai JP, Wei RL: Meta-analysis of medical intervention for normal tension glaucoma. Ophthalmology 2009; 116: 1243-1249
- Alm A: Latanoprost in the treatment of glaucoma. Clin Ophthalmol 2014; 8: 1967-1985
- European Glaucoma Society Terminology and Guidelines for Glaucoma, 4th Edition - Chapter 3: Treatment principles and options Supported by the EGS Foundation: Part 1: Foreword; Introduction; Glossary; Chapter 3 Treatment principles and options. Br J Ophthalmol 2017; 101: 130-195
- Peplinski LS, Albiani Smith K: Deepening of lid sulcus from topical bimatoprost therapy. Optom Vis Sci 2004; 81: 574-577
- Alm A, Grierson I, Shields MB: Side effects associated with prostaglandin analog therapy. Surv Ophthalmol 2008; 53 Suppl1: S93-105
- Shah M, Lee G, Lefebvre DR, Kronberg B, Loomis S, Brauner SC, Turalba A, Rhee DJ, Freitag SK, Pasquale LR: A crosssectional survey of the association between bilateral topical prostaglandin analogue use and ocular adnexal features. PLoS One 2013; 8: e61638 doi: 10.1371/journal.pone.0061638
- Aihara M, Shirato S, Sakata R: Incidence of deepening of the upper eyelid sulcus after switching from latanoprost to bimatoprost. Jpn J Ophthalmol 2011; 55: 600-604
- Sakata R, Shirato S, Miyata K, Aihara M: Incidence of deepening of the upper eyelid sulcus in prostaglandin-associated periorbitopathy with a latanoprost ophthalmic solution. Eye (Lond) 2014; 28: 1446-1451
- Inoue K, Shiokawa M, Wakakura M, Tomita G: Deepening of the upper eyelid sulcus caused by 5 types of prostaglandin analogs. J Glaucoma 2013; 22: 626-631
- Jayaprakasam A, Ghazi-Nouri S: Periorbital fat atrophy an unfamiliar side effect of prostaglandin analogues. Orbit 2010; 29: 357-359
- 16. Taketani Y, Yamagishi R, Fujishiro T, Igarashi M, Sakata R, Aihara M: Activation of the prostanoid FP receptor inhibits adipogenesis leading to deepening of the upper eyelid sulcus in prostaglandin-associated periorbitopathy. Invest Ophthalmol

Vis Sci 2014; 55: 1269-1276

- Choi HY, Lee JE, Lee JW, Park HJ, Lee JE, Jung JH: In vitro study of antiadipogenic profile of latanoprost, travoprost, bimatoprost, and tafluprost in human orbital preadiopocytes. J Ocul Pharmacol Ther 2012; 28: 146-152
- Huh D, Hamilton GA, Ingber DE: From 3D cell culture to organs-on-chips. Trends Cell Biol 2011; 21: 745-754
- Hikage F, Atkins S, Kahana A, Smith TJ, Chun TH: HIF2A-LOX Pathway Promotes Fibrotic Tissue Remodeling in Thyroid-Associated Orbitopathy. Endocrinology 2019; 160: 20-35
- Mori S, Kiuchi S, Ouchi A, Hase T, Murase T: Characteristic expression of extracellular matrix in subcutaneous adipose tissue development and adipogenesis; comparison with visceral adipose tissue. Int J Biol Sci 2014; 10: 825-833
- Langan LM, Owen SF, Trznadel M, Dodd NJF, Jackson SK, Purcell WM, Jha AN: Spheroid Size Does not Impact Metabolism of the beta-blocker Propranolol in 3D Intestinal Fish Model. Front Pharmacol 2018; 9: 947
- Chun TH, Hotary KB, Sabeh F, Saltiel AR, Allen ED, Weiss SJ: A pericellular collagenase directs the 3-dimensional development of white adipose tissue. Cell 2006; 125: 577-591
- Chun TH: Peri-adipocyte ECM remodeling in obesity and adipose tissue fibrosis. Adipocyte 2012; 1: 89-95
- Varma S, Orgel JP, Schieber JD: Nanomechanics of Type I Collagen. Biophys J 2016; 111: 50-56
- Aratani Y, Kitagawa Y: Enhanced synthesis and secretion of type IV collagen and entactin during adipose conversion of 3T3-L1 cells and production of unorthodox laminin complex. J Biol Chem 1988; 263: 16163-16169
- Mak KM, Mei R: Basement Membrane Type IV Collagen and Laminin: An Overview of Their Biology and Value as Fibrosis Biomarkers of Liver Disease. Anat Rec (Hoboken) 2017; 300: 1371-1390

- Kadler KE, Hill A, Canty-Laird EG: Collagen fibrillogenesis: fibronectin, integrins, and minor collagens as organizers and nucleators. Curr Opin Cell Biol 2008; 20: 495-501
- Huang SK, Peters-Golden M: Eicosanoid lipid mediators in fibrotic lung diseases: ready for prime time? Chest 2008; 133: 1442-1450
- 29. Olman MA: Beyond TGF-beta: a prostaglandin promotes fibrosis. Nat Med 2009; 15: 1360-1361
- 30. Oga T, Matsuoka T, Yao C, Nonomura K, Kitaoka S, Sakata D, Kita Y, Tanizawa K, Taguchi Y, Chin K, Mishima M, Shimizu T, Narumiya S: Prostaglandin F(2alpha) receptor signaling facilitates bleomycin-induced pulmonary fibrosis independently of transforming growth factor-beta. Nat Med 2009; 15: 1426-1430
- 31. Aihara K, Handa T, Oga T, Watanabe K, Tanizawa K, Ikezoe K, Taguchi Y, Sato H, Chin K, Nagai S, Narumiya S, Wells AU, Mishima M: Clinical relevance of plasma prostaglandin F2alpha metabolite concentrations in patients with idiopathic pulmonary fibrosis. PLoS One 2013; 8: e66017. doi: 10.1371/journal.pone.0066017
- 32. Lijnen HR, Maquoi E, Demeulemeester D, Van Hoef B, Collen D: Modulation of fibrinolytic and gelatinolytic activity during adipose tissue development in a mouse model of nutritionally induced obesity. Thromb Haemost 2002; 88: 345-353

別刷請求先:伊藤 格

〒060-8543 札幌市中央区南1条西16丁目
 札幌医科大学医学部眼科学講座
 TEL:011-611-2111 (内線 34350)
 FAX:011-613-6575
 E-mail:kaku.itoh@sapmed.ac.jp